

書評

J. ペリカン

『キリスト教の伝統・教理発展の歴史』

第1巻～第4巻 (教文館、2006年)

檀原久由

教会の一牧師として、また、超教派の支援を受けた神学校（東海聖書神学塾）で教派の違う信徒と接する機会を得ている者として、自分の所属する教会の歴史について聞かれて困惑する信徒の姿を見てきた。日本のプロテスタント教会の多くは諸外国からの宣教師たちの宣教協力によって誕生したと言われてきた。日本人独自の教会運営が始まると、独自の力と信仰で教会を建て上げてきたという意識が育てられ、今日の教会を取り巻く環境への対処方法論（ハウ・ツー論）や牧会者の賜物による教会形成を問題視しない雰囲気が生れて、過去の信仰ルーツに興味や関心を見出せない風潮を感じるのは私だけであろうか。

ルターの宗教改革の影響によって触発され、誕生した、多くのプロテスタント教会の信仰を考えると、2000年のキリスト教会の歴史の展開を無視しては語れないはずである。自分の属する教会の信仰ルーツを宗教改革者たちの信仰理解の中に見つけ出したとしても、ペリカンが記すように「プロテスタントの改革者たちは『教理』という言葉によって、いわゆる普遍信条、すなわち使徒信条、ニカイア信条、アタナシオス信条の中に含まれるような、受け継がれた『信仰箇条』の総体を意味する傾向」の中で育ち、改革を担ったことにどれだけ私たちは意識してきただろうか。

J. ペリカンは、その名著書「キリスト教の伝統・教理発展の歴史」の中で、キリスト教教理を「イエス・キリストの教会が神の言葉に基づいて信じ・教え・告白する事柄（内容）」と定義して、「信じられた事柄から教えられた事柄へと、またおそらく告白された事柄へと、発展して行くことによって教理は徐々に信仰の権威ある遺産の一部となった」歴史的展開を、教会教父たちの証言、教会文書、教会関係者の記録、信仰者たちの残した膨大な資料などを用いて一つの物語を描くように叙述している。訳者の鈴木浩氏が的確に指摘したように、「本シリーズの最大の特徴は、全巻を通じて一次資料をして語らしめているという点」にある。

著者は、「新約聖書の神学とは、イエスや使徒たちが教えたであろう事柄のことではなく、イエスや使徒たちが教えた教会が理解した事柄のことである」という立場に基づいて、教会がどのように教理を理解し受け入れてきたかを論じている。「一つの教理は一旦定式化されれば発展を止め、固定化したものになるというのではなく」、教会における教理の受け止め方、理解、解釈は時代の状況によって深化させられ、再解釈された展開を読者に提示する。教会における教理内容の理解や解釈の変遷が主題として取り上げられるので、主題教理が物語の主人公となって展開されていくような印象を与えることとなる。反対に、歴史上の人物や社会事件という歴史項目との関連付けや年表区分を設けて記述するような、歴史書に見られる編集方法は取られていない。

訳者の鈴木氏は、ペリカンのキリスト教教理史に関する姿勢を「東西の教会の長い伝統であった Via Media Catholica（公同的中道）に従い」、「一貫してエキュメニカルな展望を切り開いていくのは、信仰的誠実さと学問的誠実さを兼ね備えつつ、公同的中道への神学的センスの鋭敏さを持って」臨むからと説明している。

J. ペリカンは、1923年アメリカ合衆国のオハイオ州でルーテル教会牧師の家庭で生まれた。父方の祖父は在米スロバキア・ルーテル教会の主教を務め、彼自身も一時期ルーテル教会の牧師であった。東欧のスロバキア国に出身のルーツを持っていたので、子供の時からヨーロッパの幾つかの言語に親しむ生活を経験し、その為か、教理研究において重要な言語となるギリシャ語やラテン語への造詣が非常に深かった。シカゴ大学では、教理史家ハルナ

ックの弟子に当たるパウクに博士論文の指導を受けた。1998年、彼は妻と共に東方正教会に教会籍を移し、2006年に亡くなっている。

彼はエール大学の教授として、また、様々な学会の長として多数のキリスト教歴史関係の著書を出版してアメリカにおける知的精神の向上と啓蒙に尽くした、キリスト教史における指導的な学者であった。その功績が認められて、42の名誉博士号やアメリカ国会図書館から表彰が贈られている。

さて、この著作の各巻には次ぎのような副題が付けられている。第1巻は「公同的伝統の出現（100—600年）」、第2巻は「東方キリスト教世界の出現（600—1700年）」、第3巻は「中世神学の成長（600—1300年）」、第4巻は「教会と教義の改革（1300—1700年）」、第5巻の「キリスト教教理と近代文化（1700年以降）」（2008年1月予定）はまだ手元になく、発行が楽しみで待ちきれない思いでいる。

全ての巻の冒頭には一次資料となるギリシャ語、シリア語、ラテン語などの原文リストが掲載され、巻末には二次資料としての研究書・学術書の著作リストが取められている。

第1巻は「若干の定義」から始まり、第1章の「福音の準備」に入る。ここではユダヤ教とキリスト教の継続性の性格に目を向けながら、「真のイスラエル」とは何を意味するかについて、一次資料の証言を用いてキリスト教会側の自己理解が説明される。すでに著者の主眼は教会という存在が何を意味し、どのように初代教会人たちに理解されていたかを問うことに置かれている。次に初代教会の弁証的戦いの様子が記され、キリスト教の神学がユダヤ教と古典思想とに勝利する経過が論述される。第2章は「主流の外側で」という題の下、正統派キリスト教信仰と教理が対決していく、異端と呼ばれる信仰や教理がどのようなものであったのかが紹介される。聖書の正典性と権威にも触れられるが、ペリカンは論議を広げずに「聖書に関する教理」に焦点を絞る。オリゲネスの定式を引用して、「使徒たちから正しく受け継がれ、今日まで教会に存続する、教会の教理」に目を留め、異端に対する初代教父たちの信仰告白的言明が使徒的継承性と伝承の明確化に寄与したことを明らかにする。それは次ぎの第3章の「公同的教会の信仰」という題名が示す、キリスト教の組織神学が取り扱うような信仰体系の形成の序曲を演じる。そ

して、初代教会の教理的発展の頂点である三位一体の教理を扱う第4章「三位一体の秘儀」へと記述は進む。これで分かるように、主題内容の流れと教理内容の継続性ということを大切にしながら、彼の論調が展開されていることに読者は気づくだろう。

以下、字数の関係で簡単に紹介する。第2巻の巻頭では、「ギリシャ教会の教義の歴史には、7世紀以降は見るべきものがない」という教理史家ハルナックの判断に対して、ユダヤ教やイスラムとの出会い、彼らとの論争の中で、三位一体の教理と受肉の教理の理解が東方教会で深められたと著者は反論する。東方教会のイコンの受容に対する教理的発展は初代教会の教理理解とそれに典拠があるとする論証は、東方教会の神学に馴染みの薄い者にとって新しい信仰の視点を開く助けになるだろう。更に、東西教会を「最も決定的に分離させる教理的・神学的な争点で、互いにやり取りされた論争文書の中でほとんど取り上げられなかったのは」、「ラテン人もギリシャ人も、自分たちの伝統の中の教父だけを読み、引用する傾向が支配的だった」とする指摘は、ある種の警鐘を鳴らすはずだ。お互いを知らうとしないことから起こる悲劇を克服し、お互いを理解することからくる信仰の一致の可能性を探ろうとする著者の思いは、三位一体の教理における東西両教会の理解を整理し、「フィリオクエ」問題が何だったのかを解明して、提供している点に見られる。宗教改革の影響は、曖昧だった東方教会の教理や信仰告白の定式化を促し、同時に、礼典に回帰する東方教会の独自性に刺激を加えたとする指摘は、宗教改革の意義や理解に新しいページを加えると思う。

第3巻では、アウグスティヌスの神学的理解が取り上げられ、そこに関連した神学論争や中世の神学や教理の展開が取りまとめられている。それは宗教改革に続く序章のような役割を演じる記述になっている。

第4巻では、宗教改革がアウグスティヌスの神学的理解・教理的理解との関連で解明されている。ルターの贖宥売買の問題が「義」という観点から提起される。過去のローマ・カトリック教会での sacrament（告解）や煉獄の教理に関連させられ、論議されたのは当然だとしても、「神ご自身がそれによって義であるところのものではなく、神が不信心な者を義とする時に、人間に授けるもの」というアウグスティヌスの言葉に代表される神学理解に、

問題解決の糸口を見つけ出す。贖宥売買問題に端を発した宗教改革は、ルターが宣言した「教会の真の財産は、神の栄光と恵みの最も聖なる福音」という教会教理の理解を生んだだけでなく、「信仰による義認の教理」の議論の再発見へと導く論述は、教理間の連続的な緊張関係を見事に示してくれる。

プロテスタント教会にとって最重要な関心事である宗教改革に関して、著者は、「16世紀のほとんどのキリスト教教理の言明に『信仰告白』という表題が使われていた事実そのものが」受け継がれてきた教理の再定式化であり、再解釈化であることを、丁寧に教理の相互の関連性を示して読者に解説する。まるで劇的一幕が降り、次ぎの幕が上がるように、教理の内容や意味が人々の証言や文献資料を駆使して解き明かされるところに、一つの物語を読者も感じて欲しい。

ペリカンの思想の中で注目すべきことは「伝統」に対する評価にある。全巻を通して、「伝統」という言葉の持つ意味の新鮮さ、奥深さへと読者の理解の目を開かせる。「定義されたキリスト教教理が歴史の中で取った形態が、伝統である。『教理』という用語と同様に、『伝統』という言葉は、伝達のプロセスとその内容を同時に指している。従って、伝統とは教会の歴史の発展の中でのキリスト教の教えの継承を意味するが、それはまた、継承された中身も意味することになる」という、彼の理解に読者はうなずかされるだろう。

彼は、聖書さえあれば伝統など必要としないと信じている人々に対して次ぎの言葉を語る。「キリスト教の伝統は長年の探求の中で言うであろう。あなた方の為に、多くの労を取ってくれた先人たちに敬意を払うという思いがないならば、あなた方は三位一体の神に対するような非常に大切な信仰に与ることはない。もし、アタナシオスを想像上の人物と仮定して、私に新約聖書だけを持たせて部屋の中に独りきりにさせたとしても、私が三位一体の教理を考え付くかどうかは分からない。「伝統とは死んだ者の生きた信仰のことであり、伝統主義とは生きている者の死んだ信仰のことである」。

ペリカンが教理史執筆でこだわった点は、教理の変化や継続性に見ることが出来る。「信じ」「教え」「告白する」と定義された三つの事柄は一定方向に動いたり動かなかったり、また、逆方向に作用するようなダイナミックな関係であり、教理史は「教理の発展の解明に沿って、一つの段階を他の段階と

対比させることである」と述べたところにある。読者だけでなく、キリスト者に対する彼の願いは、「歴史におけるキリスト教の教えの多様性と、伝統におけるそれらの多様性の一致の可能性の両者が、その神学的な立場と共に、本書の主題」という言葉に表れている。そこには「神学の多様性と福音の一致、教理の多様性と共にある一致、教理の多様性の中での一致」に理解を得て、実践して欲しいという願いが込められている。

教会形成にも、説教にも、また個人の信仰成長にも、教理が大切な働きを演じることを、信仰の先駆者たちの訴えかけを通して、是非見出そうではありませんか。

「キリスト教には本当の新鮮さと変化があったことを受け入れることと、真の発展と成長があったことを是認すること」という著者の言葉を過去の出来事とせず、これからもそうあって欲しいと祈るものである。

(日本ホーリネス教団・安城キリスト教会牧師)